［講演］

留学生と日本人学生の協働がもたらす学び
―学部を越えた実践―

立教大学学経営学部 兼任講師
上西　智子 氏

○**小林**　浜崎先生、ありがとうございました。

続きまして上西先生のご講演です。上西先生のご講演のタイトルは、「留学生と日本人学生の協働がもたらす学び一学部を越えた実践-」です。よろしくお願いいたします。

○**上西**　こんにちは。経営学部の海外インターン、短期留学を担当しております上西と申します。よろしくお願いいたします。**【スライド⑤-1】**

私が担当している授業では、海外に学生を派遣する前に、渡航前研修をしております。その研修の中で先ほど異文化コミュニケーション学部の浜崎先生から紹介がありました正規留学生のイップさんとウィニーさんに、先生役・ファシリテーター役として協力いただき「異文化理解セッション」という 200 分の授業を行いました。その授業について本日報告させていただきます。**【スライド⑤-2】**

はじめに、私自身のバックグラウンドからお話ししたいと思います。約 30 年前に総合電機メーカーに入社し、半導体部門の営業で販売企画やマーケティングといった仕事をしておりました。半導体をやっておりますと、入社当時から、お客様はどんどん海外へ展開していき、半導体の生産拠点も海外にありました。すると職場の中で先輩方から、「シンガポールではこんなふうに働いているよ」、「香港の人たちと働くときにはこういうことに気をつけなければいけないよ」「韓国でソウルオリンピックがあったときには、こんな需要があって、こんなふうに一緒にやらないと、韓国の人はうまく仕事していけないよ」という話を聞いていました。また海外での生活面でも、例えばシンガポールに駐在していた方で、帯同

した家族がデング熱にかかってしまったために帰国しなければならなかったとか、普段から聞いていたんですね。そのような環境の中で入社10年後、私自身もアメリカに駐在することになりました。駐在前に、異文化研修のような赴任前研修とかあるのではと皆さん思われるかもしれませんが、そういうものは全くありません。私たち、日々日々、異文化に対する免疫力がついているんです。毎日毎日先輩から聞かされているということもあります。そういった先輩の話を生かして世界中の人たちとグローバルな仕事を日々やっていました。**【スライド⑤-3】**

このようなバックグラウンドを持ち、立教大学とご縁があって、2011年にキャリアセンターで就職支援をしておりました。その後経営学部から、東南アジアで活躍できる人材を育成するために海外インターンシップを開発できませんかというお話があり、大きく3つ、9日間～1か月の短期留学、6週間の海外インターンシップ、6カ月の長期海外インターンシップをつくりました。全部で12プログラム立ち上げて、現在、10プログラムが正課科目として走っているという状況です。

これまで延べ人数で383人が参加しておりまして、昨年、一昨年は、おおよそ80人～90人近くの規模で派遣してました。参加している学生は経営学部生だけではございません。他学部生の履修を2014年から可能としておりまして、これまで全ての学部の学生さんに参加いただきました。さらに大学院生で文学研究科、社会学研究科の学生も参加しています。もちろん正規留学生も参加しております。台湾、中国籍の学生も参加しています。**【スライド⑤-4】**

本日紹介する授業は2019年夏に派遣した長期インターンシップと6週間の海外インターンシップの事前研修として実施したものです。残念ながら、これらの経営学部海外プログラムは本年度をもって全て終了してしまいます。ということで、来年以降は継続できなくなりますが、今回実践したことは、皆さんのこれからの授業の参考になるかもしれませんので聞いていただければと思います。

この授業を実施することになった切っ掛けからお話ししたいと思います。私、昨年、8名の長期インターンシップに参加した学生を対象にインタビュー調査をしました。インターン生が現地でどのような生活をして、どのように業務をしてきたかというインターンシップの出発前から帰国するまでの過程の質的調査を行いました。出来上がった調査結果の資料を学生に見せ、「こんなふうになっていたね」と確認したところ、学生達から、「いや、上西さん、そこが問題なんじゃ

ないんです。実はこの帰国後が問題なんです。」と言われてしまったんです。これが質的調査をしたときの醍醐味とも言われていますが、問題は渡航中ではなく、「帰国後に自分たちの話を誰も聞いてくれない」ことだったんです。もちろん皆さんと同じように帰国後報告会はやります。そして報告会の最後の講評で必ずというくらい経営学部長が「このいい経験をぜひ立教大学の中で紹介してください」と述べるのです。しかし学生は誰にも話していないのです。

学生が大学内で海外インターンシップの経験を話さないのはなぜだろう、ということで追加研究をしていきました。その結果わかったことは、学生にとって長期インターンシップの中で経験してくることは、まだエピソード 1 とかエピソード 2 なんです。報告会や報告書で「異文化コミュニケーションが大切だ」という言葉は使うんですが、彼らの持っている「異文化コミュニケーションが大切だ」の理由を説明する具体例の引き出しは 1 つや 2 つなんです。そういったことを経験していない相手にわかるように伝えるということがまだできない。特に東南アジアでの経験、私は特にフィリピンとかラオスに派遣しているわけですが、そこでの経験というのは、そこに行ったことがあり、また働いたことがある人でないとわかってくれない。わかってくれないから、だんだん話さなくなる。だいたいの傾向として 1 カ月ぐらいしたら話さなくなってしまうんです。特に NGO などで活躍してきた学生は、社会問題を立教大学に持ち帰り、経営学部のゼミの中で語り合って解決策を考えたいと思っているんです。しかしゼミの中で報告しても誰からも質問がない。みんなわかってくれない。もう話さない。学生たちは「本当に残念だ」と言うんです。

私も企業の中にいた時、海外での出来事を話しても理解されないことは沢山あり、そこを乗り越えないと変革なんて出来ないみたいなことを学生に話していました。しかし、それ以前にインターンシップで東南アジアに行った学生が持ち帰ってくることを、全く経験が無い日本人にわかるように説明することは難いものだったのです。そもそも彼らが経験したことの概念化が出来ていないことがわかったんです。

ということで、このような話を今年の 3 月、質的研究の国際学会でポスター発表させていただきました。その際に何と丸山先生が偶然いらっしゃったのです。丸山先生に「聞いてください」と調査結果の話しをしましたら、「そういえば異文化コミュニケーション学部には東南アジアからの留学生がいるわよ」とのお話。

この学生たちを引き合わせたら、語り合い、共感を持って何か学びがあるんじゃないか、というのがこの授業を実施する始まりになりました。そして異文化コミュニケーション学部の正規留学生による授業として異文化理解セッションをやろういうことになったのです。**【スライド⑤-5】**

目的は、出発前日本人学生の異文化理解に関する気づきの醸成と外国人留学生との交流です。まさにここが学部を超えたところになります。異文化コミュニケーション学部の東南アジアからの学生と渡航前に知り合い、渡航した経験を帰国後話すことができたら、共感や新しい学びが生まれるだろうということを狙いました。

どんな授業だったかは、こちらのスライドに書かせていただきましたが、授業のビデオを見ていただく方が分かりやすいため、ビデオを流します。**【スライド⑤-6】**

（上映開始）

○**上西**　先ほどのウィニーさんですね。もう一人は今、留学しているベンジャミンさんです。正規留学生３名でやってもらいました。彼らは本授業のスチューデントアシスタントで、アイスブレイクを担当してもらいました。テーマは大きく２つのテーマをやりました。１つは Time of Value ということで、時間の価値が違うということをやりました。実際にイップさんが遅刻をするんです。実際に時間の価値の違いを体感してもらう。理由は日本人学生に対してこれまで事前授業で、時間の価値はさんざん話をしてきましたが、体感していない状態で行くために、現地でやっぱり気持ちがついていけないというような問題が起こったことがありました。そのため今回体感をしてもらったのです。

このときの授業の進め方で私が感動したことは、イップさんもウィニーさんもベンジャミンさんも、日本人学生にわかりやすいように説明していたことです。これは日本人学生ですね。発言を求められている。彼は文学部の学生です。さっきの学生は社会学部の学生。こちらは経営学部の学生ですね。

２つ目のトピックが Rude vs Straightforward ということで、失礼なく、直接物事をどのように伝えたらいいかという話です。これも今までインターン生が Straightforward で物事を言うんですが、言い方を間違えてしまったために、相手にとても失礼なことをしてしまい関係性が悪くなった。特に英語力のある学生に限ってストレートに言い過ぎてコミュニケーションが上手くとれなかったとい

うケースがありました。彼女は観光学部の学生さんですね。今、ラオスでインターンをしています。

2 つのトピックの後に振り返りとして日本人学生が内省しているところです。最後は各グループで共有し、全員の前でも発表してもらいました。彼女は文学部の 4 年生で、久々に英語で発表をしたということでした。

（映像終了）

ここでは日本人学生に、日本にいながらマイノリティー感を味わわせたいという授業にもなっています。

どうですか皆さん、なかなか外国人留学生の皆さんはエネルギッシュで活躍していると思いませんか。先ほどの映像にも映っておられましたが、浜崎先生と丸山先生にも授業に参加頂きました。先生方より「正規留学生たちが、こんなに生き生きとした姿をしているところを見たことがなかった」と感想を頂き良い機会だったと思いました。

ではこの授業をどのように作っていったかを紹介させていただきます。まず 5 月の初めに丸山先生と私でイップさんとウィニーさんへ 1 回目の趣旨説明をしました。その後、1 カ月後の 5 月 30 日までに彼らに案を作ってきてもらいました。基本的にビデオで紹介した授業は全て学生が作り込みました。学生の提案を受けながら、我々教員は、時間の配分や内省する振り返りを入れたほうが良いのではといったアドバイスを入れていきました。

その後スチューデントアシスタント 2 名にも入ってもらい、留学生と授業の検討をさせました。スチューデントアシスタントの 1 名は昨年長期海外インターンを経験しており、帰国後日本人になかなかわかってもらえないという経験をしていました。海外インターン経験学生と留学生のコラボレーションを期待し、学生のみで内容の検討をさせて 6 月 29 日の本番を迎えました。**【スライド⑤-7】**

では、この授業がどのような結果になったかというのを、私も証拠ではありませんが、学生全員にアンケートをとった上でヒアリング調査を行いました。今ちょうど 3 名が海外でインターン中ですが、彼らにもスカイプで話を聞いて纏めました。

『この授業を通して全体的に変化はありましたか』の質問に対して、日本人学生からは、自分の当たり前が、多様な文化バックグラウンドの人達にとっては当たり前ではないことは分かった。留学生から説明を受けることで、具体的にイメ

ージすることができ、派遣先での行動がよりスムーズになったと感じられる。マイノリティーになることの抵抗感もなくなったという、いい効果が沢山出ていました。

ただし、変化がなかったと答えた学生は3名おりまして、留学生のイップさんとウィニーさん、あともう一人、フィリピンでインターンをしていたスチューデントアシスタントでした。この時、私が反省したことが彼らファシリテーターに内省の機会を与えていたかったことでした。日本人学生に対しては振り返りという時間をきちんと設けました。実はこのアンケートを取った時にも、一番たくさんコメントを書いてくれた学生は、ビデオ視聴をした学生だったのです。授業に出られなくてビデオ視聴をして、A4、1枚のレポートを書いた学生がいます。その学生たちが一番コメントを書いていました。ということは、やはり振り返って、内省をして、意味づけをしていくことができるかどうかがポイントだったのです。私も反省しまして、イップさんとウィニーさんには、アンケート後のヒアリングをする中で問いかけていきました。「この時どうだったの？　この時はどんな感じで授業を進めてみたの？」という形で問いを進めていった結果、最後にイップさんから、「自信になった。自信がついた。」という言葉が出てきたのです。また、フィリピンでインターンシップ経験があるスチューデントアシスタントからも、「今まで出会ったことなかった異なる留学生と話をすることによって、今までと違う考え方に気がついた」ということで、やはり変化は見られました。**【スライド⑤-8】**

では『アジアとか海外の文化について理解が深まりましたか』という質問に対しては、今回異文化の体感をさせたのですが、やはり体感するということは重要だったようです。時間にルーズな人を授業内で実際に体験したことで、アジアの文化を体験的に学ぶことができた。インターンシップ中には、日本とは違う国なんだということを常に念頭に置いて行くことができたということが結果に出てきました。

ただ、やはりこういった異文化に対する理解は、先ほど浜崎先生のお話を伺ってよくわかったのですが、異文化コミュニケーション学部の学生さんは普段から考えているんですね。イップさんとウィニーさんからは文化の違いを考えるということに対して「特別なことではなかった。普段から考えている。」と言うのです。ここから日々何故違うのかと考えていくということが異文化の理解には必要なの

ではないかと思いました。**【スライド⑤-9】**

また逆に、アジア、海外のことを学ぶことによって、日本に対しての気づきがあるのではと考え、『日本の文化の理解が深まりましたか』という質問をしました。日本人学生は、今まで気づかなかった日本の文化に気づいた。海外の文化を学ぶときにはどうしても日本の文化と比較して考えたという成果がありました。

また、留学生の 2 人はいつものことだとの答えでした。いつも考えていることだと思いますが、今回、スチューデントアシスタントは留学生から沢山質問を受けたというのです。「このエピソードを話したら日本人にわかる？」みたいな。

（ウィニーさん、イップさんに向けて）ウィニーさん、イップさんにどうだった？ウィニーさん、イップさん、聞いてみた？

スチューデントアシスタントの佐藤さんが言うには、「そういえば私、留学生達から何度も質問されたんですよ。（留学生）このエピソードはどう？　（佐藤さん）うーん、ピンとこない。（留学生）このエピソードは？（佐藤さん）ピンとこない。（留学生）このエピソードは？（佐藤さん）あ、それだったら、みたいな感じをやっていた」と。このような協働は、日本人の学生にとって、「えっ、そんなところを不思議に思うんだという気づき」になっていました。恐らくイップさんとウィニーさんにとっては、いつものことだったかもしれませんが、例えば時間の価値の違いを説明するにあたっても、どのエピソードで話すことが日本人学生に理解しやすいかという学びがあったのではと思います。**【スライド⑤-10】**

さらに、授業を通して、『留学生との交流とか、日本人学生とのつき合いに変化はありましたか』の質問に対しては、日本人学生は、この授業で初めて留学生と話したという学生もいました。4 年間で初めてだという。そのような学生達には、今回のような授業の機会があるのは有難く、もっと留学生と交流したいと思うようになっていました。

なお、この授業は 1 回限りでした。他の先生方からもご報告があったように、1 回のみの授業を通しての交流を切っ掛けにして継続的に繋がっていくことは難しいと学生達からの意見もありました。やはり 1 回だけ日本人学生と留学生の交流を仕掛けたとしても、もう一回、もしくは何回か会う機会を教員側で用意する必要もあると思います。**【スライド⑤-11】**

『インターンシップで本授業が生かされたか』という質問には、もちろん生か

されておりました。現在アメリカで、多国籍企業の国営ラジオ局でインターンシップをしている学生からは、職場が多国籍であったので、ここで得た知識を活用できたとの回答でした。また、その国に順応しようという心構えが出来た学生もいました。心構えですから異文化への免疫もついたのだと思います。**【スライド⑤-12】**

最後は『今後もこういった授業やってみることをどう思いますか？』という質問に対し、全員が続けたほうが良いという結果でした。留学生の皆さんは、少し遠慮がちに、もし興味のある学生がいたらやったら良いと言います。日本人学生はなかなかこういう機会がないため、ぜひやってもらいたいという希望が出ております。さらに、日本人講師が行う講義形式の授業では得られないリアリティーが生まれるからという意見もありました。リアリティー、私もそうだと思うんです。社会に出れば日本の中でもああいう状況（授業のビデオのような状況）に学生達も置かれます。留学生たちのエネルギッシュなあの姿がありますので、是非続けて行ければと思います。そこで、続けたほうが良いというんだったら、どうやったら続けられるのか、学生達と意見交換をしました。**【スライド⑤-13】**

まずはイップさん、ウィニーさんから、春休みに渡航する学生向けに対して、また講師をやっても良いという提案がありました。そして留学生達からの提案を日本人学生に伝えたところ、「ぜひ私たちも手伝いたい。一緒につくってみたい」という意見が出ています。夜中に是非協力したいとメールを送ってきた学生もいました。

ただし、春休み渡航者向けだけでは続かない、興味がある学生しか来てくれないよね、と話をしたところ、学生から、４月の前半あたりに開催するのがいいんじゃないかとの提案がありました。この理由は、立教大学に入学するという時点で、ちょっとは海外に興味のある学生がほとんどだと言うんです。そうは言っても入学して、サークルが決まりました、部活決まりましたとなります。５月、６月になってきて、部活が忙しくなってきたりすると、そこに居場所が出来て、居心地がよくなってくる。居心地がよくなってくると、入学当初考えた留学も、後回しになってしまう。

一番アンテナが立っているのは入学したての頃だというのです。これは学生からのアイデアですが、やはり４月、入学したての１年生、こういった時期に、今回紹介したような授業をやってみるよ、セッションをやるよ、と声かけをする

と参加者も増えて良いという提案がありました。

さらに学びを深めるためには、ファシリテーター役の学生やスチューデントアシスタントに対しても内省することで意味づけをさせ、成長を促すための時間を設ける必要があると考えています。他にはセッションに参加した学生同士が継続的に交流できる場も設けようかと考えています。今回は学生たちで継続交流の機会を設けることができなかったために、私も仲介に入り、12 月 16 日にやることになっています。**【スライド⑤-14】**

纏めとして、学生達にとっての今回の授業における意味や学びを大きく 3 つにまとめました

先ず正規留学生にとっては、自分たちが持っている情報の共有です。自分たちの文化や背景、シンガポールやインドネシアはこうだよ、時間の価値が違うよという共有ができて、まさに生き生きとした顔になる、活躍の場になりました。自信がついたということです。日本人のバックグラウンドや文脈の理解を促したということもあります。日本人にわかりやすく説明するためには、どうしたら良いだろうかと考え、協働することで気づきを得ていました。

次にスチューデントアシスタントにとっては、海外インターン先での体験したことを共感してもらえる人がいませんでしたが留学生で同じ地域から来ているような人たちと話をすると、あるある話ができていました。日本の当たり前に対して疑問に持つようにもなった機会にもなっていました。

最後、履修学生にとっては、渡航前の異文化に対する免疫力がついていました。こういったことを日々聞いていれば、渡航に対するハードルというのも低くなります。もう一つ、日本にいながら海外のエネルギッシュな刺激を受けたということがあげられます。私は毎年短期留学でフィリピン大学へ学生を派遣していますが、これは東南アジアの学生達のエネルギッシュな刺激を受けさせるためのものです。しかしフィリピン大学へ派遣しなくても、立教大学の授業の中で出来るのではと思いました。また継続的に留学生とかかわる機会が増えました。帰国後、異文化コミュニケーション学部の授業を履修している学生もおります。

これらを発展的に継続することによって、これまでの先生方からのお話にもありましたように、立教キャンパス内が多様な留学生と日本人学生の語りの場になってくれたらと思っております。企業で出来きていることが大学で出来ないこともないだろうとも思います。ぜひこの後、全体討議などもございますので、皆様

と何かこの提案に対してお話しさせていただければと思います。

　これで私の報告を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。（拍手）**【スライド⑤-15】**

○**小林**　上西先生、ありがとうございました。

　それでは、ただいまより休憩に入りたいと思います。

【スライド⑤-1】

立教大学日本語教育センターシンポジウム2019

「多様な日本語力の学部留学生の受け入れと大学での学び」

留学生と日本人学生の協働がもたらす学び
ー学部を越えた実践ー

立教大学経営学部
兼任講師
上西智子
2019.12.7

【スライド⑤-2】

目次

1．はじめに
2．学部を超えた授業実施の背景
3．異文化理解セッション授業実施内容
4．授業実施までの取組み
5．学生アンケートとヒアリング調査結果
6．今後の取組みについて
7．まとめ

【スライド⑤-3】

１．はじめに

●自己紹介

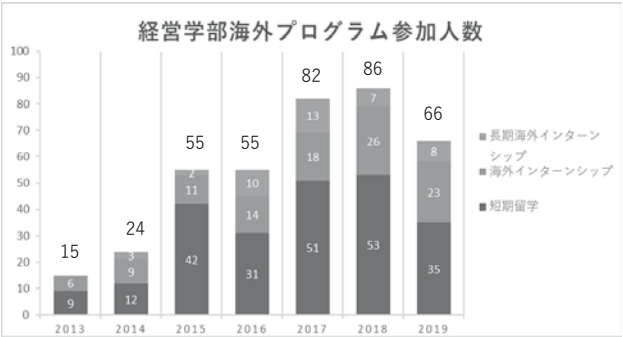
1990年　㈱日立製作所電子営業本部入社
2000年　Hitachi Semiconductor (America) Inc. 出向
2011年　ルネサスエレクトロニクス㈱退職
2011年　立教大学キャリアセンター　キャリアコンサルタント
2012年　立教大学経営学部　海外プログラム開発

●経営学部海外プログラム一覧（2013年～2019年）

短期留学 （9日間～4週間） Short-term Study Abroad 1・2	海外インターンシップ （6週間） Global Internship	長期海外インターンシップ （5ヵ月～6か月） Long-term Global Internship
①フィリピン **②マレーシア** **③タイ** **④ボストンサマーセッション** ⑤タイ・ラオス・ベトナム＊ ⑥ロンドンビジネス体験＊	**⑦英語研修学校・ｴﾝﾃﾞﾗﾝ大学** （ﾌｨﾘﾋﾟﾝ、ｶﾅﾀﾞ、ｵｰｽﾄﾗﾘｱ） **⑧東南アジア** （ﾗｵｽ、ｶﾝﾎﾞｼﾞｱ、ﾀｲ） **⑨欧州旅行代理店** （ｽﾍﾟｲﾝ、ﾌﾗﾝｽ、ｲﾀﾘｱ、ﾄﾞｲﾂ）	**⑩フィリピンプログラム** （英語研修学校） **⑪海外一般プログラム** （フィリピン、ラオス） **⑫アカデミックインターン** （アメリカン大学）

＊は単年度で終了

【スライド⑤-4】



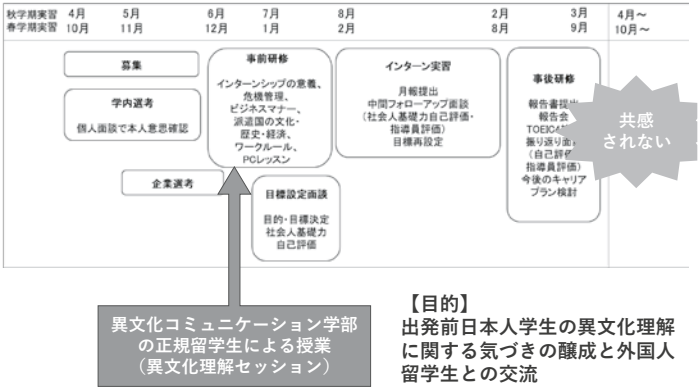
＜参加学部＞
経営、文、経済、理、社会、法、異文化C、観光、コミ福、現心、GLAP
文学研究科、社会学研究科

2013年～2019年：延べ参加人数　383人（内正規留学生述べ5人）

【スライド⑤-5】

2．学部を超えた授業実施の背景

例）長期海外インターンシップの授業内容



異文化コミュニケーション学部の正規留学生による授業（異文化理解セッション）

【目的】
出発前日本人学生の異文化理解に関する気づきの醸成と外国人留学生との交流

【スライド⑤-6】

3．異文化理解セッション授業実施内容

①日時：2019年6月29日（土）3限・4限
　　＊6月15日（土）アジアの文化・経済・歴史
　　＊6月22日（土）フィリピンの文化・経済・歴史

②参加者：計15名
　ファシリテート：異文化コミュニケーション学部2年　3名（正規留学生）

　ｽﾁｭｰﾃﾞﾝﾄｱｼｽﾀﾝﾄ：文学部史学科4年（長期海外ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ・ﾌｨﾘﾋﾟﾝ参加）
　　文学部文学科4年（ｹﾝﾌﾞﾘｯｼﾞｻﾏｰﾌﾞﾛｸﾞﾗﾑ・教育実習参加）

　履修学生　　：文学部4年、経済学部4年、観光学部4年
　　社会学部3年、経営学部3年、観光学部3年、文学部2年

　教員　　：異文化コミュニケーション学部　浜崎学部長、丸山教授
　　＋経営学部　上西

③その他：ビデオ視聴学生2名（経済学部3年、経営学部2年）

④テーマ：Time of Value、Rude and Straightforward

【スライド⑤-7】

４．授業実施までの取り組み

5月8日　正規留学生への趣旨説明（打合せ１回目）

5月中旬　派遣学生選考

5月30日　正規留学生の提案ベースに内容打ち合わせ
ｽﾁｭｰﾃﾞﾝﾄｱｼｽﾀﾝﾄとの顔合わせ
（打合せ2回目）

6月13日　正規留学生の再提案
ｽﾁｭｰﾃﾞﾝﾄｱｼｽﾀﾝﾄよりｱｲｽﾌﾞﾚｲｸの提案
（打合せ3回目）

6月26日　正規留学生とｽﾁｭｰﾃﾞﾝﾄｱｼｽﾀﾝﾄでの内容打ち合わせ
～学生のみで検討～

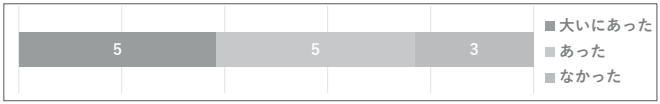
6月29日　本番

【スライド⑤-8】

５．学生アンケートとヒアリング結果

実施時期：2019年11月
対象者　：正規留学生2名、SA2名、履修学生9名（内ビデオ視聴学生2名）計13名

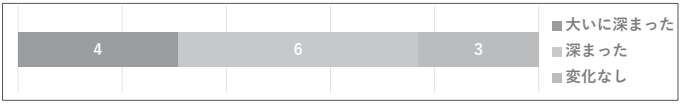
①授業の実施・準備を通して変化（新たな気づき・学び）はありましたか？



- **広い視野を持つようになった。自分が当たり前だと思っていたことが、他のバックグラウンドを持つ人には当たり前ではないことがわかったから。**
- 時間という一部分における差異を認識することで、前提の違いを理解できたため
- **時間について、自分の中で受け入れられる基準と受け入れられない基準はどこだろうかと考えるきっかけになった。**受け入れられない基準に遭遇した時、ただイライラするだけでなく、解決策として自分ならどうするだろうかとも考えるようになった。
- 知っていた内容ではあったものの,**留学生から説明を受けることで具体的にイメージすることができ,派遣先での行動がよりスムーズになったと感じる。**
- **文化的なマイノリティになることへの抵抗感が減ったから。**
- コミュニケーションをとるうえで相手のことを知り、考えることは必要不可欠であることがわかった。
- **自信がついた。新しい考え方に気が付いた。**（「なかった」学生へのヒアリング結果）

【スライド⑤-9】

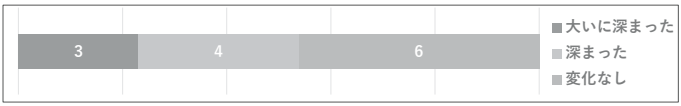
②アジア・海外の文化（言語・習慣等）の理解が深まりましたか？



- **シチュエーションごとにどうするか考えるディスカッションをしたり、時間にルーズな人を授業内で実際に体験したりすることで、アジアの文化を体験的に学ぶことができたから。**
- 日本以外の国での行動(上司のチャックが開いている等)から習慣を理解できたため。
- **日本の常識で考えてはいけないということをこの授業では強く意識することができた。**これによって**インターンでも「日本とは違う国なんだ」ということを常に念頭に置くことができた。**
- アジア全般的に広く浅く取り扱ってくださったので、自分の派遣先国以外にの国についても大まかに概要を知ることができたため。
- **普段から考えているため変化なし。フィリピンで経験していたため変化なし。（「変化なし」学生へのヒアリング結果）**

【スライド⑤-10】

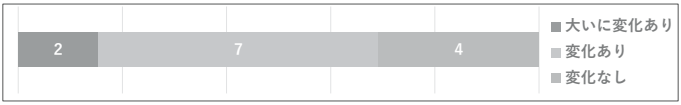
③日本の文化（言語・習慣等）の理解が深まりましたか？



- **他のバックグラウンドを持つ人の意見をきき、自分達のものと比べることにより、普段意識していないような自分達の文化がはっきりしたから。**
- **他の国の文化を学ぶ上で、自分の軸となっている日本の文化について考え、他国と比較することは必要不可欠であったから。**
- 日本人は海外の人から見たらどうみえるのか知れたのでよかった。
- **海外の文化を学ぶときにはどうしても日本の文化と比較して考える**ので、海外の文化を学ぶと共に自国の文化への理解も深めることができた。
- 日本の常識は世界の常識ではないから
- 日本の文化について知る意欲は高まったが、この授業で理解が深まることはなかった。
- **授業の内容を検討する際、正規留学生より、具体的な事例について提案があり、日本人にとってピンとくるか否かの質問があった。（「変化なし」学生へのヒアリング結果）**

【スライド⑤-11】

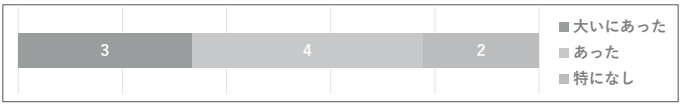
④授業を通して
留学生（or日本人学生）との交流（付き合い方）に変化がありましたか？



- 文化の違いを濁して付き合うのではなく、その違いを質問などして知っていきたいと思うようになった。おそらくこの異文化理解の授業で、**留学生たちと話し、自分が思っている以上に自分の文化が異なると知れたからだと思う。また、留学生たちも文化が違うことに不快感ではなく興味を持っていることが知れたからだと思う。**
- 発表者の留学生たちがとても明るく、仲良く3人で発表をつくりあげている姿をみて、日本の学生にはない姿であるなと、とても感銘を受けたため。**エネルギッシュな留学生のように自分もなりたいと思った。**
- **日本における当たり前が存在せず、**それをなくした相互理解が図れるようになった。
- 特に大きな変化はなかったけど、**留学生ともっと交流したいと思った。**
- **異文化コミュニケーション学部の、多文化共生についてディスカッションで学ぶ授業を受講するようになった。**
- **文化の違いをリスペクトすることで付き合い方が変わった。**
- 日本にいる時にも海外の人と付き合う機会は多くなれていたせいか、そこまで変化はなかったように感じる。（「変化なし」学生）
- **大学で今回初めて留学生と話をしたが、その後機会がないため**（「変化なし」学生へのヒアリング結果）

【スライド⑤-12】

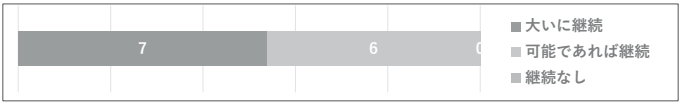
⑤インターンシップで本授業の経験が活かされましたか？（履修学生対象）



- 人に明るく接すること。
- 色々な価値観があることを知れたので、それを心の隅に置きながら生活できた。
- インターンの業務でも生活面でも、日本とは違う国であるということを強く意識できるきっかけになったと思う。自分の価値観や常識を押し付けることは相手にとっても不快だということを意識づけできるようになり、**その国に順応しようという心構えができたから。**
- **時間感覚について日豪で大きな差があったから**
- 日本で考えなかったことも考えるようになった。
- **職場が多国籍企業だったので、ここで得た知識を活用できた。**

【スライド⑤-13】

⑥今後も留学生による異文化理解授業を継続したらよいと思いますか？



- 強制にしないほうがいいと思う。 留学生は自分がこれから違う文化を体験することがわかっているから留学を決める。もし事前準備したら、その体験が変わる。しかし心配な学生にはあったほうが良い。（正規留学生）
- 異文化理解に関心がある学生には継続した方が良いが、あまり関心がない学生には必要がないと思う。（正規留学生）
- **気軽な異文化交流は双方にとって良い機会であると思う。**ただ、せっかく留学生たちが時間をかけていい授業を用意してくれているものの、聞き手が少ないと感じた。**もう少し大きい規模の聞き手を相手に行っても良いのではないかと思った。**
- 日本にも海外の人がたくさんおり海外の文化と触れ合う機会は多くなっているとはいえ、**自分でそのような機会に出会えない人のためにも今回のような授業は非常に有意義であると考える。また、これからグローバル化していく社会の風潮に反してなかなか海外の文化と積極的に触れ合う意識の少ない学生も多いと思う。そのような人たちにもきっかけを与えるという意味で継続していくべきだと思う。**
- **このような機会がないとめったに留学生と交流しすることがないため。**日本語でお互いの国のことなどを話し合える機会は特に海外インターンに行く前は重要だと思う。
- インターンシップにこれから参加する学生にとっては、英語で自分の意見を主張する準備になるから。また、自分達と文化の違う留学生が授業してくれることで、**日本人講師が行う講義形式の授業では得られないリアリティが生まれるから。**

【スライド⑤-14】

6．今後の取組みについて

発展的に継続していくための取組み

＜学生へのヒアリング会での意見交換より＞

◆ 今学期の1月中に正規留学生と夏の海外インターンシップ参加学生の協働による異文化理解セッションの開催（授業でなくとも良い）

対象：春の海外インターンシップ参加学生
春学期渡航予定の希望学生、興味がある学生

◆4月の前半あたりに開催する

対象：入学したての1年生（海外にアンテナが立っている）

◆ファシリテート役の学生が内省することで意味づけし成長をするための機会・時間を設ける

◆セッションに参加した学生同士が継続的に交流できる場を提供する
＊今回参加学生のケースでは12月中に交流の場を調整中

【スライド⑤-15】

7．まとめ

正規留学生

◆ 自分たちが持っている情報を共有でき、活躍の場となった
◆ 日本人のバックグラウンドや文脈の理解を促した

スチューデントアシスタント

◆ 海外インターン先での体験を共感してもらえる場を持てた
◆ 日本の当たり前に対し疑問を持つようになった

履修学生

◆ 渡航前の異文化に対する免疫力がついた
◆ 日本に居ながら、海外のエネルギッシュな刺激をうけた
◆ 帰国後も継続的に留学生と関わる機会が増えた

発展的に継続

立教キャンパス内が多様な留学生と日本人学生の語りの場へ